

松本陽子 Matsumoto Yokoi The Day I Saw the Evening Star を宵の 見た明 た明日 日星

出品リスト 展覧会ガイド

展覧会の構成について

「松本陽子 宵の明星を見た日」展は、1950年代末の初期作品から2026年の最新作まで35点と、ドローイング15点により構成されています。

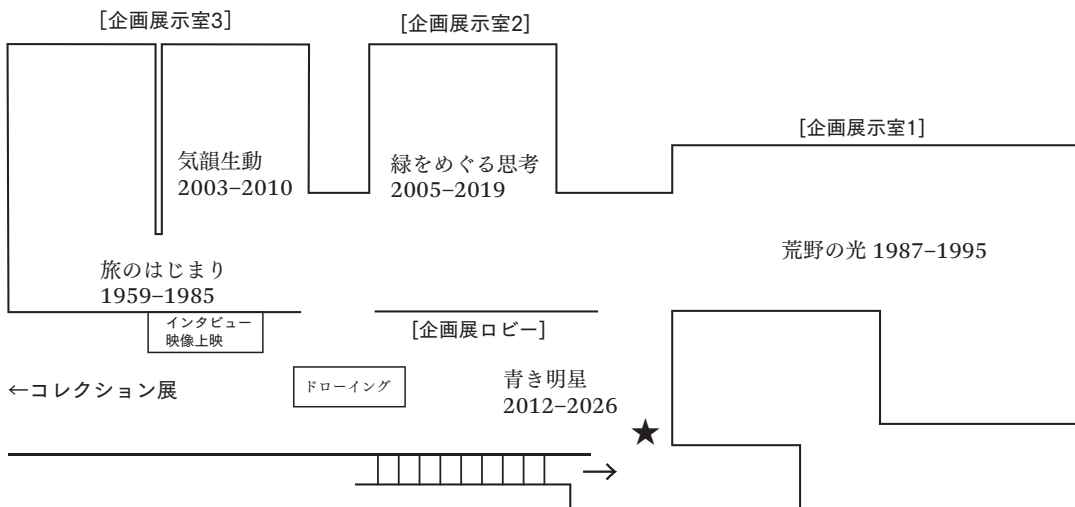
作品は形式と制作年代により5章に分類しました。最後にドローイング（スケッチブック）とインタビュー映像を紹介します。

会場の都合により、章の配置は時系列順ではありません。下の図面をご参照ください。

- [展示室ロビー] 「青き明星 2012-2026」
- [企画展示室1] 「光は荒野のなかに輝いている 1987-1995」
- [企画展示室2] 「緑をめぐる思考 2005-2019」
- [企画展示室3] 「旅のはじまり 1959-1985」
- [企画展示室3] 「気韻生動 2003-2010」
- [展示室ロビー] ドローイング（スケッチブック）、インタビュー映像

当会場では、次の作品は展示されません。

no.10、20、23、27、29、44、45



[企画展ロビー]

青き明星 2012-2026

《植物に視つめられる私》(no.39)は、今年完成したばかりの最新作です。深い青が画面全体をしっとりと覆います。白と薄いピンク色が、やさしく画面を彩ります。

2010年代に入って、松本は「白」や「青」主に用いはじめます。《宵の明星を見た日》(no.37)は、2023年から描き始められ、2024年にロンドンのギャラリーで初めて発表されました。伸びやかな青は、夜空や、夜空を眺めた遠い記憶を思い起こさせます。近年松本は、身の回りの事象、とりわけ自然への関心を率直に表明し、葡萄や筍、蔓といった具体的な植物のイメージを画面に描いています。画面上に目を凝らすと、繊細で多様な表情を持つ線が見えてきます。

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
34	震える光	2012	油彩、木炭、パステル、 カンヴァス	73.0×91.0	ヒノギャラリー
35	空中庭園	2016	油彩、木炭、パステル、 カンヴァス	130.5×194.0	ヒノギャラリー
36	植物についての一考察II	2023	油彩、木炭、パステル、 カンヴァス	130.5×194.0	個人蔵
37	宵の明星を見た日	2023	油彩、木炭、パステル、 カンヴァス	130.0×162.0	UESHIMA MUSEUM COLLECTION
38	私的植物図鑑	2024	油彩、木炭、パステル、 カンヴァス	182.0×182.0	個人蔵
39	植物に視つめられる私	2026	油彩、木炭、パステル、 カンヴァス	181.2×227.5	個人蔵

[企画展示室 1]

荒野の光 1987-1995

「ピンク」の絵画によって、松本陽子は確かな評価を得ました。水をたっぷりに加えたアクリル絵具を、木綿のキャンバスに染み込ませ、布で拭き取るという独自の技法で、この絵画は生み出されています。1967年から約1年のアメリカ滞在中に、アメリカ絵画を吸収し、また当時新しい画材であったアクリル絵具に出会ったことが大きな契機となりました。

ピンクは、松本が大学卒業の頃にすでに用いていた色です。油絵具の重厚な質感を敬遠し、油彩画を中心とする伝統への反発から、選んだ色でもありました。絵の前に立つと、湿った大気に包まれるかのような感じがします。

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
9	ペイルシェバの荒野I	1987	アクリル絵具、キャンバス	227.0 × 182.0	国立国際美術館
11	黒い岩	1990	アクリル絵具、キャンバス	200.0 × 250.0	東京都現代美術館
12	ペイルシェバの荒野II	1990	アクリル絵具、キャンバス	200.0 × 250.0	ふくやま美術館
13	エフライムの山地II	1990	アクリル絵具、キャンバス	200.0 × 250.0	松本市美術館
14	夜	1991	アクリル絵具、キャンバス	250.0 × 200.0	東京都現代美術館
15	黒い岩V	1991	アクリル絵具、キャンバス	200.0 × 250.0	個人蔵
16	光は荒野のなかに輝いているII	1993	アクリル絵具、キャンバス	250.0 × 200.0	東京国立近代美術館
17	光は荒野のなかに拡散しているII	1993	アクリル絵具、キャンバス	188.0 × 273.0	愛知県美術館
18	振動する風景的畫面III	1993	アクリル絵具、キャンバス	182.0 × 227.0	倉敷市立美術館
19	降下する光II	1995	アクリル絵具、キャンバス	250.0 × 200.0	G foundation collection (東京・クアラルンプール)
21	薄く溶かされたブルー	1995	アクリル絵具、キャンバス	130.3 × 162.1	ヒノギヤラリー

[企画展展示室2]

緑をめぐる思考 2005-2019

「緑」の絵は、2005年に初めて発表されました。1990年代後半に松本が30年ぶりに油絵を用いたとき、生まれた絵は黒、紫を基調としていました。その頃から松本は、「いつか、自律した緑の絵画を描きたい」と思っていました。しかし、木や草など自然物の存在を思わせる緑は、松本にとってとても難しい色でした。

よく見ると、とても多くの色が用いられていることに気づきます。薄く地塗りした綿カンヴァスに木炭でドローイングを行い、油絵具のピンクやオレンジ、白、青、数種の緑を筆で重ね、パステルでオレンジや白の描線を加えています。緑という色の豊かさが、多種多様な色で表されています。

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
26	私的光景	2005	油彩、木炭、パステル、カンヴァス	200.0 × 250.3	神奈川県立近代美術館
28	光は地平に輝いている	2008	油彩、木炭、パステル、カンヴァス	193.0 × 259.0	松本市美術館
30	変容III	2013	油彩、木炭、パステル、カンヴァス	130.5 × 194.0	長野正晴
31	宇宙エーテル体再び	2016	油彩、木炭、パステル、カンヴァス	181.7 × 227.3	東京都現代美術館
32	振動する風景的畫面	2017	油彩、木炭、パステル、カンヴァス	200.0 × 250.0	UESHIMA MUSEUM COLLECTION
33	振動する風景的畫面	2019	油彩、木炭、パステル、カンヴァス	200.0 × 200.0	個人蔵

[企画展展示室 3]

旅のはじまり 1959–1985

1950年代末から1980年代までは、松本が画家として出発し、油絵具をやめてアクリル絵具に取り組んだ時期にあたります。東京藝術大学の卒業制作として松本は、厚塗りの油絵具による人体像を提出します。1960年4月の「第10回モダンアート展」に抽象絵画3点が初入選後、個展を重ね、評価を得ていきました。

順調な滑り出しの陰で、松本は油彩画での制作に行き詰まりを感じていました。1960年代末から松本は、アクリル絵具を用いた制作を開始。独自に開発した技法の試行錯誤が続きました。1970年代から1980年代にかけての作品群は、探索の過程を段階的に示すとともに、叙情的で華やかな色使いを、しっかりした画面構造が支え、魅力に満ちています。

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
1	作品I	1959–1960	油彩、カンヴァス	130.0×194.0	東京都現代美術館
2	作品III	1962	油彩、カンヴァス	146.0×146.0	個人蔵
3	作品V	1965	油彩、カンヴァス	130.5×194.5	京都国立近代美術館
4	自然のなかの形象I	1974	アクリル絵具、カンヴァス	146.0×146.0	個人蔵
5	自然に反する闇I	1974	アクリル絵具、カンヴァス	130.0×162.0	個人蔵
6	混沌(グレー)	1978	アクリル絵具、カンヴァス	135.0×194.0	個人蔵
7	背景としてII	1982	アクリル絵具、カンヴァス	200.0×200.0	個人蔵
8	混沌	1985	アクリル絵具、カンヴァス	135.0×194.0	個人蔵

(企画展展示室3)

気韻生動 2003-2010

2000年代に描かれた、「白」や「黒」の絵画です。章のタイトルである「気韻生動」は、風格や気品、また生き生きとした生命感があらわされていることを評価することばです。《生命体について》(no.25)は、大画面を埋め尽くした線の絡まりが、発光しているかのように見えます。《宇宙エーテル体》(no.22)は、通常1日で描き切るアクリル画のキャンバスが冷夏で乾かず、2日かかりで完成させました。偶然から生まれた筆跡が白地の上で躍動しています。《境界線の黒》(no.24)は、30年ぶり再開した油彩画の展開を示す作品です。バーントアンバーとウルトラマリンブルーを重ねた暗褐色のなかに、闇と光の空間が描き出されています。

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
22	宇宙エーテル体I	2003	アクリル絵具、キャンバス	200.0×250.0	東京都現代美術館
24	境界線の黒	2003	油彩、木炭、 パステル、キャンバス	162.0×130.3	神奈川県立近代美術館
25	生命体について	2010	油彩、木炭、 パステル、キャンバス	200.0×200.0	G foundation collection (東京・クアラルンプール)

[企画展示室3、企画展示室ロビー]

ドローイング、スケッチブック

カンヴァスの絵を描くときに、松本が下図や習作をつくることはありません。水彩や木炭、コンテなどを使って紙に描いたドローイングは、手や頭を覚醒させ、自身の調子を見極めるためのものだと、松本は言います。全身で絵と向かい合う松本の態度を、ドローイングからも理解できます。

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
41	ドローイング	1991	木炭、紙	100.5×65.5	個人蔵
42	ドローイング	1991	木炭、紙	100.5×65.5	個人蔵
	スケッチブック				個人蔵

番号	作品名	制作年	技法材質	寸法	所蔵
40	空の情景	1989	アクリル絵具、カンヴァス	45.7×53.1	ヒノギャラリー



松本陽子年譜

1936年	5月、東京都中野区上ノ原に生まれる
1945年	3月、山梨県韮崎町に国民学校から集団疎開。10月、東京に戻る
1956年	4月、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻に入学
1960年	3月、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業 4月、「第10回モダンアート展」に抽象絵画3点が初入選、10周年記念大賞を受賞
1967年	6月、美術評論家の藤枝晃雄と結婚 8月、渡米し、クリーブランドに滞在する 12月、ニューヨークに移り、美術館や画廊を見てまわる。アクリル絵具と綿のロウカンヴァスの存在を知る
1968年	8月、帰国。目黒区に居を定める
1974年	綿のロウカンヴァス、アクリル絵具とメディウムによる、ピンク色を主調とした絵画を描き始める
1978年	10月-11月、康画廊（東京）で個展。アクリル絵画12点を出品
1987年	小金井市へ移り住む
1991年	5月-6月、個展「近作展」（国立国際美術館、大阪）
1996年	9月、アキライケダギャラリー（東京）で個展。27年ぶりに描いた黒を主調とした油彩7点を発表
2005年	1月-2月、ヒノギャラリー（東京）で個展。同ギャラリーではその後も定期的に個展を開催 6月-9月、「今日の作家 X 西村盛雄・松本陽子展」（神奈川県立近代美術館 鎌倉）開催。油彩による緑を主調とした絵画4点を初めて発表
2009年	8月-10月、「光 松本陽子／野口里佳」（国立新美術館、東京）開催。1982年から2009年までの絵画47点を展示
2020年	3月、30年近く制作の場とした八王子市千人町を離れ、アトリエを自宅に移す
2023年	3月-6月、東京都現代美術館で「MOT コレクション皮膜虚実／Breathing めぐる呼吸」開催。同館が所蔵する松本作品全点が展示される
2024年	ロンドンとニューヨークで個展開催（White Cube Mason's Yard、ロンドン／White Cube New York、ニューヨーク）
2025年	5月-6月、個展（ヒノギャラリー、東京）。青を主調とした油彩画を日本で初めて発表する